

《 魔女 の 宅急便 》

Hideaki-Kitani



ラジオ：西北カリキヤ地方の天気予報をお送りします。

大陸より張り出した高気圧によって、天気は全体に回復に向かっています。

今夕は西北西の風、風力は3、晴れ、すばらしい満月の夜になるでしょう。

明日は晴れでしょう。明後日は晴れでしょう。

次は生鮮食品市況をお送りします。カリキヤ中央市場調べ・・・

キキ：ジジ、今夜に決めたわ。出発よ。お母さん。いらっしゃい。

お母さん、天気予報聞いた。今夜晴れるって、絶好の満月だって。

母：キキ、あなた、またお父さんのラジオ持ち出したの。

キキ：ねえ、いいでしょう。ローラさん、今日は。わたし決めたの。今夜にするわね。

母：だってあなた。ゆうべはひと月延ばすって。

キキ：次の満月が晴れるかどうか分からないもの。私、晴れの日に出発したいの。

母：あっ、待ちなさい。キキ。

ローラ：出掛けるって、魔女の修行のこと。

母：ええ、古いシキタリなんです。

魔女になる子は13歳になったら、家を出るっていう・・・。

ローラ：早いもんだねえ。キキちゃんがもうそんなになるんだね。

母：でも、あの年で独り立ちなんて、今の世に合いませんわ。

ローラ：あなたがこの町に来た日のことをよく覚えてますよ。

13歳の小さな女の子が、ほうきに乗って空から降りて来たわ。

目をキラキラさせて、ちょっと生意気そうで・・・。

母：でも、あの子ったら、空飛ぶことしか覚えなかったんですよ。

この薬も私の代でおしまいですわ。

ローラ：時代のせいですよ。何もかも変わってしまう。

でも、私のリウマチには、あなたの薬が一番効くわ。

キキ：あら、あんなにせかしたくせに、いざとなったらグズつくのね。

ジジ：違うよ。旅立ちはもっと慎重に、おごそかに行くべきだと思うんだよ。

キキ：そして、ひと月延ばして、素敵なボーイフレンドが現れたらどうするの。

それこそ出発できやしないわ。

ジジ：どうなることやら、心配だね。決めたらすぐの人だから。

キキ：あらそう。私は贈り物のふたを開ける時みたいにワクワクしてるわ。

あっ、お父さん。私、今夜、発つことにしたの。

父：何だって。

キキ：さっき決めたの。

父：だってほら、来週キャンプに行く道具を借りて来たのに。

キキ：ごめんなさい。

父：あっ、これはいかん。あっあー。ありがとう。じゃお待ちしてます。沖野です。

今夜キキが発つことになりまして。ええ、そうです。

母：よさそうね。

キキ：せめてコスモス色ならいいのにね。

母：昔から魔女の服は、こうって決まってるのよ。

キキ：黒ネコに黒服で真っ黒黒だわ。



- 母 : キキ、そんなに形にこだわらないの。大切なのは心よ。
- キキ : わかってるわ。心の方はまかしといて。お見せできなくて残念だわ。
- 母 : そして、いつも笑顔を忘れずにね。
- キキ : はい。
- 母 : 落ち着く先が決まったら、すぐ手紙を書くのよ。
- キキ : お父さん、あのラジオちょうだい。ねえ、ラジオはいいんでしょう。やったー。
- 父 : とうとう取られたな。どれ、私の小さな魔女を見せておくれ。
母さんの若い頃によく似てる。
- キキ : お父さん、ねえ、高い高いして、小さい時みたいに。
- 父 : よし。いつの間にこんなに大きくなっちゃったんだろう。
うまく行かなかったら帰って来ていいんだよ。
- キキ : そんなことになりませんよーだ。
- 父 : いい町が見つかるといいね。
- キキ : うん。
- 男 : 自分で住む町を見つけるなんて大変だね。
- 女 : 大丈夫よ、キキちゃんなら。
- 友達 : ねえねえ、どんな町にするの。大きな町。
- キキ : うん、海の見えるところ探すつもり。
- 友達 : うらやましいな。
- キキ : あたし修行に行くのよ。よその町で一年頑張らないと魔女になれないんだから。
- 友達 : でもディスコあるでしょう。
- 母 : キキ時間よ。
- キキ : はい。
- 母 : あなた、そのハウキで行くの。
- キキ : うん。新しく作ったの。かわいいでしょう。
- 母 : だめよ。そんな小さなハウキじゃ。お母さんのハウキを持って行きなさい。
- キキ : やだ、そんな古いの。
- 母 : だからいいのよ。よく使い込んであるから、嵐にも驚かずに飛ぶわ。
ね、そうしなさい。
- キキ : せっかく苦労して作ったのに。ねえジジ。
- ジジ : 僕もお母さんのハウキがいいと思う。
- キキ : 裏切り者。
- ローラ : キキちゃん。町の暮らしに慣れたら、自分のを作ればいいじゃない。
- 母 : 気をつけて。
- 父 : しっかりね。
- キキ : 行ってきます。
- 友達 : キキ、頑張ってね。頑張れ。G O G O キキ、G O G O キキ。
- 母 : 相変わらず下手ね。
- 父 : 大丈夫だ。無事に行ったようだよ。
- 男 : あの鈴の音も当分聞けないな。
- ジジ : どっちへ行くの。
- キキ : 南よ。海の見える方。ジジ、ラジオつけて。今、手がふさがっているの。早く。
- キキ : 今晚は。



魔女B：あら、あなた新人。

キキ：はい、今夜出発したばかりです。

魔女B：その音楽止めてくださらない。私静かに飛ぶのが好きなの。

キキ：あ、あの知らない町に住みつくて大変ですか。

魔女B：それはね、いろいろあったわ。

でも私、占いができるので、まあまあ、やってるわね。

キキ：占い！。

魔女B：近ごろは恋占いもやるのよ。

キキ：は一。

魔女B：あなた何か特技あって。

キキ：えっ、いろいろ考えてはいるんですけど。

魔女B：そう、私はもうじき修行があけるの。胸を張って帰れるのでうれしいわ。

あの町が私の町なの。大きくはないけど、まあまあってところね。

あなたも頑張ってるね。

キキ：はい。

魔女B：じゃあね。

ジジ：やな感じ。あの猫、見た。ベー。

キキ：特技か。きゃー、何よ。あの天気予報は。

ジジ：だめだよ。貨物列車だもん。

キキ：雨が止むまで、一休みしよう。

ジジ：しかられないかな。

キキ：見つければね。あー、びしょ濡れ。

ジジ：ここ、揺れない。

キキ：あー、いい匂い。

キキ：ごめん。あなたたちのご飯で、知らなかったの。

ジジ、海よ、海。すごい、初めて。

ジジ：何だ。ただの水たまりじゃないか。

キキ：見て見て。大きな町。あの町に魔女いるかしら。

ジジ：さあねえ。

キキ：行くよ。ジジ。くっついてる。

ジジ：ああ。

キキ：見てー。海に浮かぶ町よ。時計塔よ。私こんな町に住みたかったの。

ジジ：でもここも、他の魔女がいるかもしれないよ。

キキ：いないかもしれないわ。すごいねえ。

ジジ：ちょっと大きすぎるよ、この町。

老人：ああ、魔女とは、めずらしいなあ。

キキ：おはようございます。あの、この町に魔女はいますか。

老人：いや、近ごろは、とんと見かけんな。

キキ：聞いた。私この町にする。おじいさんありがとう。

老人：いや。

ジジ：ほんとに降りる気。

キキ：もちろんよ。



ジジ : みんな見てるよ。

キキ : 笑顔よ。第一印象を大事にしなきゃ。あの私、魔女のキキです。

こっちは、黒猫のジジ。お邪魔させていただきます。

私、この町に住まわせていただきたいんです。

きれいだし、時計塔もすてきだし。

おばあさん : そう、気に入ってもらえてよかったわ。

警官 : 君、君、道路に飛び出しちゃだめじゃないか。危うく大事故になるところだ。

町中を飛び回るなんて非常識きわまりない。

キキ : でも私は魔女です。魔女は飛ぶものです。

警官 : 魔女でも交通規則は守らなければいかん。住所と名前は。

キキ : 家に連絡するの。

警官 : 君は未成年者だろ。必要があればそうすることもある。

トンボ : どろぼう、どろぼう。

警官 : 君はここにいたまえ。

ジジ : キキ。

トンボ : ねね、ね、うまくいったろ。「泥棒って」言ったの僕なんだぜ。

君、魔女だろ。飛んでるところを見たんだよ。ほんとにホウキで飛ぶんだね。

ね、そのホウキ、ちょっと見せてくれない。

子供達 : トンボ、朝っぱらからナンパかよ。はっはっ。

トンボ : ヘヘっ、バカー、おっと。頼むよ。ちょっとだけ。ね、いいだろ。

キキ : 助けてくれてありがとう。でも、あなたに助けてって言った覚えはないわ。

それにきちんと紹介もされてないのに女性に声をかけるなんて失礼よ。ふん。

トンボ : さすが魔女だな。僕のばあちゃんみたいだ。

キキ : ついて来ないで。

トンボ : あー、格好いい。

(ホテル)

ボーイ : お泊まり。どなたか保護者の方はいらっしゃるのですか。

キキ : 私は魔女です。魔女は13歳で独り立ちするんです。

ボーイ : では、身分証明書などを。

キキ : 結構です。

ジジ : 食べないの。

キキ : ほしければ、ジジにあげる。

ジジ : もう夕方になっちゃうね。

キキ : 行きましょう。

ジジ : 別の町を探そうよ。大きくても、もっといい町があるよ、きっと。

(パン屋さんの前)

おその : 奥さーん、忘れ物。奥さーん。あーあ、困ったね。

これがないとあの子、大泣きするんだよ。お客さん悪いけどちょっと待ってて。

これ届けて来るから。

キキ : あの、私でよければ届けましょうか。

おその : ええ、でも。

キキ : あそこを曲がった乳母車の人でしょう。

おその : じゃ頼むわ。悪いね。

キキ : いいえ、ジジ行くよ。パン屋さんに頼まれました。忘れ物です。



おその：ありがとう。お待ちどうさま。いつものね。ああ、ご苦労さん。

入って待ってて。ありがとう、お待ちどうさま。はい、どうも。気をつけてね。

驚いちゃったよ。あんた空飛べるんだね。

キキ：この手紙を預かって来ました。

おその：あの人のサインじゃない。「おしゃぶり受け取りました。ありがとう」

キキ：じゃ、私はこれで。

おその：ああ、待って。ね、ちょっとよってかない。お礼もしたいしさ。

主人：おい。

おその：こっちよ、座って。コーヒーがいい。

キキ：はい。ありがとう。

おその：君はこれ。なるほどね、自分の町を見つけるってわけか。

キキ：この町の方は魔女がお好きじゃないみたいですね。

おその：大きな町だからね、いろんな人がいるさ。でも私はあんたが気に入ったよ。

で、泊まる場所は決まったの。なんだ、そうなら早く言えばいいのに。

うちに空き部屋があるから使っていいよ。

キキ：本当ですか。奥さん。

おその：はっはっは、奥さんじゃないよ。ここらじゃパン屋のおそので通ってるんだよ。

キキ：私、キキです。こっちは黒猫のジジ。

おその：ちょっと汚いけど、好きにしていいいから。

キキ：はい。

おその：水とトイレは下よ。何かあったら遠慮なく言いなさい。

キキ：ありがとう。

ジジ：粉だらけだね。

キキ：うん。

ジジ：僕、明日になると白猫になってると思うよ。

キキ：ジジ、海が見えるよ。

ジジ：あした、他の町を探す。あつ、ちえつ、ちえつ、気取ってやんの。

キキ：私、もうちょっと、この町にいるわ。おそのさんのように私のこと、
気に入ってくれる人が、他にもいるかも知れないもの。

キキ：電話を引くのって、いくらすると思う。

ジジ：電話。

キキ：そ、お店開くの。おはようございます。

おその：おはよう。よく眠れた。

キキ：ええ、いい匂いね。手伝っていい。

おその：うん。宅急便ね。

キキ：私、空を飛ぶしか能がないでしょ。だからお届け屋さんはどうかなって。

おその：おもしろいよ。空飛ぶ宅急便ってわけね。考えたね。

あの部屋使っていいからね。

キキ：本当。うれしい。電話を引こうと思ってるの。

おその：お金がかかるんじゃない。

キキ：少しなら持って来たわ。

おその：もったいないよ。ねえ、このお店の電話を使いなよ。

お客が付くまでが大変なんだからさ。

私、こんなおなかだから、あんたが時々、店番やってくれれば、

部屋代と電話代なしってのでどう一お。ついでに朝ごはんもつける。

キキ : はー。ありがとう。私うんと働くね。おそのさんて、いい人ね。

おその : はっはっはっ。

キキ : ジジ、終わったよ。お買い物に行こう。

(街に出かける)

ジジ : 飛び出しちゃだめだよ。田舎じゃないんだから。

キキ : わかってるわよ、ついよ、つい。

キキ : もうちょっと素敵な服ならよかったのにね。暮らすって物入りね。

ジジ : キキ、見て見て。お金足りる。

キキ : しばらくはホットケーキで頑張るしかないわね。素敵ねー。

トンボ : 止めて止めて。魔女子さーん。今日は飛ばないの。

な、ほんとに黒い服着てるだろ。ねえ、ちょっと待ってよ。魔女子さん。

おその : キキ、ちょうどよかった。お客さんよ。

キキ : えっ。

おその : お届けものを頼みたいっていう人がいるの。

キキ : ほんと。すぐ行きます。地図。

おその : お店のお得意さんなのよ。あんたの話が出たら、ちょうどいいからって。

(デザイナーの家)

マキ : かわいい魔女さんね。

キキ : キキと言います。

マキ : これを届けてほしいんだけど、夕方までに間に合うかしら。

キキ : はい。

マキ : おいの誕生日のプレゼントなんだけど。

急に仕事が入って、行けなくなっちゃったのよ。

キキ : どちらへお届けしましょう。

ジジ : 僕がいる。

マキ : ちょっと遠くないかしら。

キキ : 真っすぐ飛べますから。

マキ : お礼はいかほど。

キキ : まだ決めてないんです。

マキ : これでどうかしら。

キキ : こんなにたくさん。ありがとうございます。



トンボ : すごいなー。

おその : 私も飛べたらね。

トンボ : おばさん、あの子知ってるの。

ジジ : キキ、どこまでのぼるつもり。

キキ : 仕事始めだもの。お巡りさんに邪魔されたくないじゃない。

ジジ : 僕はまた天使にお届け物をするのかと思ったよ。

キキ : あの岬の向こうだわ。行くわよー。ジジ、私この町気に入ったわ。

ジジ : 安心するのはご用心。

キキ : これでお母さんに手紙を書けるもの。カリの群れよ。素敵。

私たちと同じ方向に行くんだわ。どうしたのかしら。

ジジ : 風が来るって。

キキ : えっ。

ジジ : 高く高く、のぼろうって。

(カラスの巣の横)

キキ : あっ、大変。あーいけない。ごめんごめん。許して。

あなたの卵をねらったんじゃないのよ。あー、怖かった。

ジジ : キキがいけないんだよ。せっかくカリが風だって教えてくれたのにさ。

キキ : ほんとね。すごいね。あの風を使って、あんなに高くへのぼってる。

ジジ : キキー。いなくなっちゃってる。

キキ : ほんと。大変

ジジ : 落ちたときかな。

キキ : うん。

ジジ : 卵どろぼうが、また来たって言ってるよ。

キキ : そんなどうしよう。あっ、ハウキを、やめて、やめなさい、こら、やめて。

困ったな、まだ騒いでいるわ。

ジジ : あーあ。魔女も落ちぶれたものだよ。カラスは魔女の召使だったのにさ。

キキ : それは大昔のことでしょう。

ジジ : 日が沈んでから、そっと近づいて探すしかないね。

キキ : 約束の時間に遅れちゃう。ジジ、こうなったら最後の手段よ。

ジジ : 見つかったちゃうよ。

キキ : お願い。探したらすぐ助けに行くから。

ジジ : あのうち。

キキ : うん、動いちゃだめよ。

ジジ : 息は。

キキ : できるだけしないで。

ジジ : えっ。

(届けものを届ける)

キキ : おばちゃんのプレゼントだー。変なの。

おの姉 : 遅かったわね。妹から電話があって待ってたのよ。

キキ : すいません。サインをお願いします。

おい : お母さん、カナリヤ移してもいい。

おの姉 : いいわよ。逃がさないように気をつけてね。

おい : うん、あはっ。

キキ : ありがとうございます。

おい : おとなしくしな、ピッチ。こら、だめだよ。逃げちゃ。

ジジ : キキ、早く。

(絵かきの家)

キキ : 困ったわ。この辺のはずなんだけど。あった。

ごめんください。どなたかいらっしゃいませんか。ごんくださーい。

絵かき : はーい。今、手が離せないの。上がって来てくれる。なに。

キキ : あの窓のところにある縫いぐるみの黒猫。私が落としたものなんです。

絵かき : いい子ね。動かないでね。さっき森で拾ったのよ。

キキ : あの、返していただけますか。

絵かき : ちょっと待って。今いいとこなの。素敵よ、あんた、美人だね。

なーんだ、そうならそうと早く言えばいいのに。ちょっと気に入ってたんだ。

キキ : すみません。あっ、破けちゃってる。

絵かき : カラスたちの仕業ね。あの時、騒いでたから。



キキ : どうしよう。お客様の物なのに。

絵かき : ねえ、交換条件ってのどう。13歳で独り立ちね。

いいね、私そういうの好きよ。

キキ : あの直ります。

絵かき : 任せとけて。

マキの姉 : ケットちゃん。

(テレビ : ガハハ)

マキの姉 : ケット、早くお風呂に入りなさい。お客様、じきに見えるわよ。ケット。

絵かき : できた。

キキ : ありがとう。

絵かき : さあ、急いで、ジジ君を助けに行きな。

キキ : でも、まだ片付けが・・・。

絵かき : もう、十分だよ。さあ、行った、行った。

キキ : ありがとう。

ケット : 本当にジェフって変わってるよ。

マキの姉 : おかしいのよ。

ジェフったら、猫の縫いぐるみがすっかり気に入っちゃって、離さないの。

男 : 子犬だと思ってるんじゃないかな。

おばあさん : マキが聞いたら怒るわね。

ケット : いいんだ。ジェフにあげるんだよ、ぼく。

マキの姉 : マキおばちゃんに手紙書いたら。

ケット : うん。

おばあさん : ジェフもすっかり年をとったからね。優しくしたあげるのよ、ケット。

ケット : でも寝てばかりいるよ。

マキの姉 : ケット、ジェフが出たがっているわ。開けてあげて。

ケット : はい。すんだら自分で閉めるんだよ。

キキ : ジジ。

ジジ : 遅いよ。

キキ : ごめんね。

ジジ : あの人が助けてくれたんだよ。縫いぐるみを届けてくれるって。

キキ : お願いできますか。

ジジ : まだ体おかしい。おなか減った。

キキ : ほんとね。私もくたくた。でも素敵な一日だったわ。そうだ、縫いぐるみを見つけてくれた人がね、私をモデルに絵を描きたいって。

ジジ : ヌード。

キキ : ばか。

(パン屋)

キキ : 暇ねえ。

ジジ : だめだよ、店番中なのに。

キキ : だってお客さんちっとも来ないんだもん。

ジジ : もうすぐ混む時間になるよ。

キキ : 違うの。お届け物のお客さん。ジジ、このままずっとお客さんが来なくて、おばあさんになるまで、毎日、毎日、まーいにち、ホットケーキばかり

だったらどうしよう。

ジジ : ぼくホットケーキ好きだよ。焦げてなきゃ。

キキ : ふん、猫って気楽ね。今にホットケーキみたいに、まん丸くなっても知らないから。

素敵ね、ファッションデザイナーなんだって。

ジジ : あそこんちの猫、嫌いだよ。やたら気取ってんだもん。

キキ : はい、グーチョキパン店です。えっ、はいやってます。ジジ、お客よ、お客。

4時半にお宅へ伺うんですね。かしこまりました。ご住所を承ります。

はい、はい。青い屋根のお宅ですね。ありがとうございます。

必ずお伺いします。

トンボ : やあ、ください。これ。

キキ : ありがとうございます。

トンボ : 頼むから怒らないで聞いてよ。今日、僕らのクラブのパーティーがあるんだ。

飛行クラブというんだけど、ぜひ君に来てほしいんだよ。これ招待状。

まじめな集まりなんだよ。みんな君の話を聞きたがっているんだ。

キキ : いらっしやい。

客 : ここで配達をやつとると聞いたんだが。

キキ : はっ、はい。お届けものですか。

客 : こいつを大急ぎで運んでくれないかね。

キキ : お預かりします。

客 : 大丈夫かい。

キキ : ええ。

トンボ : 手伝おうか。

キキ : いい。

トンボ : 6時に迎えにくるから、それまでに決めといてね。じゃ。

客 : いくらだね。

キキ : あの、市内ですか。市外でしょうか。

客 : 箱に書いといたんだが。

キキ : すいません。おそのさん。どうしよう。パーティーの招待状もらっちゃった。

おその : 素敵じゃない。行ってきなさいよ。

キキ : でも私、この服しか持ってないもん。

おその : あら、そんなこと気にしてるの。それとってもいいよ。黒は女を美しく
見せるんだから。

キキ : ほんと。

おその : 仕事は。

キキ : 二つも入ってるんだ。もう4時だわ。大変。すみません。店番お願いします。

ジジー、ジジー。

おその : うふふ。

ジジ : あんなにあの子のこと怒ってたのに。パーティーへ行くの。

キキ : 声をかけないで。集中しないと、この荷物重いんだから。

ありがとうございます。急がなくちゃ。次は4時半で約束なのよ。

青い屋根よ。

(おばあさんの家)

キキ : あの、お届けもののご依頼をお受けしたキキと申します。

おばあさん : まあ、どうぞ。時間どおりでしたね。

キキ : はい。

おばあさん : 奥様、見えましたよ。

奥様 : あらあら大変、困ったわね。もう約束の時間になってしまったの。

おばあさん : どうぞ。

キキ : はい。

おばあさん : それ預かりましょう。黒猫にホウキ。

ほんとに ひいおばあちゃんの言ったとおりだわ。

キキ : 魔女のキキと申します。

奥様 : まあまあ、かわいい魔女さんだこと。それがね、届けてもらうはずのお料理がまだ焼けてないのよ。ちっともオーブンの温度が上がらないの。おかしいわね。だめね、機械も人も年をとると。孫のパーティーに暖かいお料理を届けてもらおうと思ったのよ。私の自慢の料理、ニシンとカボチャの包み焼き。でも諦めましょう。孫には電話で謝っとくわ。あなたには無駄足をさせてしまったわね。ばあさん、ばあさん、魔女さんにお礼をお渡しして。

おばあさん : はい。

奥様 : いいのよ。お約束のとおり、お渡しして。

キキ : 奥様。

奥様 : そうさせてちょうだい。あなたのせいではないんだから。

キキ : 奥様、私、まだちょっと時間があるんです。そのオーブンは使えないのですか。

奥様 : えっ、あーこれね。昔はよくこれで焼いたけど、でも随分使ってないから。

キキ : 薪のオーブンなら私もお手伝いできます。田舎で母に仕込まれました。

奥様 : そうは言っても大仕事よ。

おばあさん : 名案ですよ。私は電気は嫌いだけど、薪なら暖炉用のがあるし。

キキ : やりましょう。奥様。

奥様 : そうね。じゃ、お願いしようかしら。

ジジ : いい子ぶって。パーティーに遅れても知らないよ。

キキ : だってお金だけもらえないよ。急がなくちゃ。

おばあさん : ほら、まだ使えますよ。

奥様 : お母様のお仕込みがいいのね。段取りがいいわ。なんか、ワクワクするわね。

おばあさん : 私は電気は嫌いです。

奥様 : ちょうど頃合いね。あっ、そのくらいでいいわ。後は待つだけね。

キキ : 40分くらいでしょうか。

奥様 : ええ、そうね。さっ、一休みしましょう。

キキ : 他に何かお手伝いすることありませんか。

奥様 : あーそう。じゃ、お願いしようかしら。

おばあさん : 悪いわねえ。

キキ : いいえ。

ジジ : もう間に合わないと思うよ。たぶん。

キキ : 心配屋。フルスピードで飛ばせば、15分でギリギリセーフよ。

奥様 : お茶が入りましたよ。こっちいらっしゃい。6時からパーティー。間に合うの。

キキ : 大丈夫です。15分あれば足りますから。

奥様 : 大変、あの時計10分遅れてるのよ。

キキ : えっ、どうしよう。

奥様 : 早く、カマドへ、ねっ。

キキ : はい。

奥様 : ばあさん、ばあさん。

キキ : どうでしょう。
 奥様 : よく焼けてるわ。早く。
 キキ : はい。
 おばあさん : 急いで。
 キキ : はい。
 奥様 : 忘れ物よ。
 キキ : いけません、こんなに。
 奥様 : 受け取ってちょうだい。
 おばあさん : 早く、早く。
 奥様 : 素敵なパーティーを。
 おばあさん : そこから出て。



キキ : さっきまであんなにいいお天気だったのに。
 ジジ : ひげがピリピリする。 雨宿りしよう。
 キキ : だめよ。間に合わなくなっちゃうもん。このお料理も冷めちゃうわ。
 孫 : 何か御用。
 キキ : お届け物です。
 孫 : まあ、ずぶ濡れじゃない。
 キキ : 急に降って来たもんですから。でもお料理は大丈夫です。
 孫 : だから、要らないって言ったのよ。
 孫の母 : なーに。
 孫 : おばあちゃんから、またにしのパイが届いたの。
 キキ : あの、受取にサインをお願いします。
 孫 : 私、このパイ嫌いなよね。
 ジジ : 今のほんとにあの人の孫。ベえっ。パーティーもう間に合わない。
 キキ、あの男の子だよ。今ならまだ間に合うよ。
 おその : 大変だったわね。あの男の子、ずいぶん待ってたのよ。
 キキ : もういいんです。こんななりじゃいけないもん。
 ジジ : どうしたの、キキ。頭でも痛い。何か食べようよ。僕、おなか減っちゃった。

 おその : キーキー。具合が悪いの。ひどい熱ね。
 キキ : 頭がガンガンするの。
 おその : あんた、昨日ちゃんと体をふかなかったでしょ。
 キキ : 私、このまま死ぬのかしら。
 おその : はっはっ、ただの風邪よ。薬をもって来てあげる。それに何か
 食べなきゃだめね。
 キキ : 欲しくない。
 おその : つらくても、ちょっと食べた方がいいの。ミルクがゆを作って来てあげるわ。
 ジジにもね。
 ジジ : ニャーオ。
 おその : 風邪の時はこれが一番。はい、ジジ。熱いから気をつけな。
 さっ、冷めないうちに食べな。起きられる。
 キキ : どうしても食べなきゃだめ。
 おその : 治りたかったらね。そうだ、さっきあの男の子がお店へ来たよ。病気だって
 言ったら、魔女も病気になるんですかだって。後でお見舞いに来たいって、

どうする。

キキ : だめ。

おその : 多分そう言うと思って、丁重にお断りしといたわ。よく休みなさい。

疲れが出たのよ。窓開けとくね。

キキ : おそのさん。

おその : うん。

キキ : ううん、なんでもない。 ジジ、ジジ。

ジジ : にゃあー。

キキ : ジジ、ご飯よ。

おその : キキ、今朝はどう。

キキ : もうすっかりいいみたい。ごめんなさい。朝寝坊しちゃった。

おその : いいのよ。後でちょっと頼みたいことあるの、来て。

キキ : はい。さんてうの。

おその : そっ、お礼はこれでいい。

キキ : いらないわ。近くだから歩いて行けるし。

おかみ : だめよ。仕事は仕事。必ず本人に渡してね。

キキ : ジジ。

ジジ : 仕事。

キキ : あら、お友達。なんて言う名前。

ジジ : リリーっていうの。今、行く。

キキ : いいよ。ちょっとだから。リリーさん、よろしくね。

リリ : ニャーオ。

(コポリに届けもの)

キキ : 素敵。

トンボ : ねえ、魔女子さん。散歩。

キキ : ううん、コポリという人を探してるの。

トンボ : それ、僕のことだよ。

キキ : えっ。

トンボ : そっちへ回ってすぐに行くから。

キキ : おそのさんだ。

トンボ : ありがとう。

キキ : あ、この前ごめんね。随分待たせちゃって。

トンボ : ううん、君こそ、雨の中大変だったね。ねえちょっと寄ってかない。見せたい

ものがあるんだ。ねえ早く。こいつの完成を祝うパーティーだったんだよ。

人力飛行機の機関部なんだ。ほら。翼と胴体は別のところで組み立て中なんだ。

この夏休み中に飛ばすんだぜ。僕がパイロットで、ブーン。

ねえ、海岸に行かない。不時着した飛行船を見に行こうよ。

キキ : 飛行船。

トンボ : あれ、テレビ見なかった。

キキ : 寝てたから。

トンボ : じゃ、なおさらだ。行こう。

キキ : これで行くの。

トンボ : そうさ、訓練、訓練。足を鍛えなくちゃ。さあ乗って。

キキ : 私、自転車初めてなの。

トンボ : ほんと、そりゃいいや。ちょっと足で支えててね。勢いがつくまで。行くよ。

蹴って。

キキ : 降りる。

トンボ : ノー。

通行人 : はっはっはっ・・・

女の子 : 頑張れ。

トンボ : 急カーブにかかったら体を外に倒して。

キキ : えっ。

トンボ : 体傾けないと曲がれないんだ。それっ。いいぞ。その調子。すごーい。最高。

キキ : あ、飛行船で、あれ。

トンボ : ああ。あっ、飛んだ。

キキ : トンボ、大丈夫。

トンボ : キキは。

キキ : 平気。

トンボ : そんなに僕の顔、変。

キキ : 違うの。ごめん。だってとても怖かったの。

トンボ : 僕も怖かったよ。ね、さっき魔法使ったの。

キキ : わかんない。夢中だったから。あーあ、自転車めちゃくちゃ。

トンボ : あっつけねえ。仲間に怒られる。キキ、自転車を頼む。

キキ : どうしたの。

トンボ : 自転車こぎ過ぎたんだ。まっ待てー。いいなー、あんなんで世界一周できたら最高だろうな。ねえ、初めて空飛んだ時、どんなんだった。

キキ : 覚えてないの。とても小さかったから。でもちっとも怖がらなかったって、母さんは言ってたけど。

トンボ : あーあ、僕も魔女の家に生まれればよかった。キキなんかホウキでスイーけどさ、僕なんか、これだもん。

キキ : 私のは仕事だもん。楽しいことばかりじゃないわ。

トンボ : そうかな。才能生かした仕事だろ。素敵だよ。

キキ : 私、ちょっと自信をなくしてたの。でも今日ここへ来てよかった。海を見てると元気になれそう。

トンボ : よかったらいつでもつれて来てやるよ。訓練を兼ねてね。

キキ : トンボっていい人ね。

トンボ : あれ、今頃気がついた。

キキ : だって、始め不良みたいだった。

トンボ : おふくろがさ、よく言うんだ。この不良息子、空ばかり見てないで、勉強しろーってね。

友人達 : トンボー。

女の子 : すっごいニュースよ。

トンボ : なに。

女の子 : いいこと、早く。

トンボ : ちょっと待っててね。

女の子 : 飛行船の中見せてくれるって。行く。

トンボ : わー、すごいぞ。行く行く。

女の子 : ねえ、あの子誰。

トンボ : 魔女のキキって言うんだ。キキ、一緒に行かない。飛行船の中見せてくれるって。

キキ : 私、いい。

トンボ : ねー、行こうよ。

女の子 : あの子知ってる。宅急便やってる子よ。

女の子 : えー、もう働いてるの。たくましい。

トンボ : 行こうよ。みんなに紹介するから。

キキ : 行かない。さよなら。

トンボ : 何だろう。ねっね、何怒ってんの。

キキ : 怒ってなんかいないわ。私は仕事があるの。ついて来ないで。

女の子 : トンボー。行くよ。

(キキのスランプ)

ジジ : ニャーオ、ニャーオ。

キキ : ジジ、私ってどうかしてる。せっかく友達ができたのに、急に憎らしくなっちゃったの。素直で明るいキキはどこかへ行っちゃったみたい。冷たいの。
ジジ、いくらいい人で来たからって、食事の時間は守って欲しいわ。
ちっとも片付きやしない。

ジジ : ニャーオ。

キキ : 何よ。猫みたいな声出して。

ジジ : ニャーオ。

キキ : ジジ、あなた言葉どうしたの。キキって言ってごらん。ジジ、ジジ。
どうしちゃったのかしら。ジジの言葉が分からなくなっちゃったみたい。大変。
魔法が弱くなってる。 あーっ。

おその : 飛べない。魔法が消えちゃったわけ。

キキ : とても弱くなっちゃったの。だからお届け物の仕事も休まないと。その代わり、
お店の手伝い、きちんとやります。どうかあの部屋にいさせてください。

おその : そりゃかまわないけど、魔法の力って戻るんでしょ。

キキ : 分からないの。ハウキは作れるけど。

主人 : おい。

トンボ : キキ、撲。トンボ。今日さ、飛行船から手を振ったのを見た。船長がね、
テスト飛行にらせてくれたんだ。もう最高だったよ。もしもし聞いている。キキ。

キキ : もう電話しないで。

トンボ : え、なに。聞こえないよ。船長がね、君に会いたって。もしもし、もしもし。

おその : どうしたの。キキ、顔が真っ青よ。

キキ : 私修行中の身なんです。
魔法がなくなったら、私、何の取り柄もなくなっちゃう。

絵かき : キキ、ハーイ。

キキ : あっ。

絵かき : 何だ。ちっとも来てくれないんだから、自分から来ちゃったよ。

キキ : ごめんなさい。

絵かき : というのはうそ。買い出しに来たついで。

キキ : 寄ってって。今仕事が一区切りしたとこなの。

絵かき : もちろん、そのつもり。案外いい部屋ね。

キキ : よかったら食べて。今お茶入れて来る。

絵かき : お茶はいいよ。ミルクあったらくれる。

キキ : うん。

絵かき : ほんとだね。あの縫いぐるみにそっくりだ。君、ジジって言うんだろ。

商売はどう、軌道に乗った。・・・うまくないの。

キキ：今お休み中なの。

絵かき：どうりで落ち込んでしまったよ。魔法にもそんなことがあるんだね。

ねえ、私の小屋に泊まりにおいでよ。

キキ：えっ。

絵かき：店の人に断ってさ、一日くらいいいじゃない。ジジ、あんたも来るかい。

はっはっはっ、彼女の方がいっか。ね、決めよ。すぐ出発。

(絵かきの家へ)

絵かき：来てるよ。

キキ：素敵。

絵かき：何よ、この美人が目に入らないのかしらね。

キキ：うふふ。

絵かき：えー、私を男だと思ったの。

男：そんななりしとるもんな。

絵かき：あーあ、この脚線美が分からないとはね。

キキ：カラス。

絵かき：すっかり友達になっちゃったんだ。

キキ：へー。

絵かき：ヤッホー。ただいま。

キキ：今日は。この前はごめんね。

絵かき：先に入ってて。水汲んで来るから。　　どう。

キキ：素敵。

絵かき：キキに会ってね。この絵描こうって決めたの。でもね、この子が決まらないのよね。

キキが来るのをずっと待ってたんだよ。

キキ：これ私。

絵かき：まーね。ちょっとそこに座ってモデルになってくれる。

キキ：でも私、こんなに美人じゃない。

絵かき：はっはっはっ、あんたの顔いいよ。この前よりずっといい顔してる。

さっ、座って。その椅子がいい。ちょっと顔上げて、遠くを見るように。

そっ、そうしてて。

魔法も絵も似てるんだね。私もよく描けなくなるよ。

キキ：ほんと。そういうときどうするの。

絵かき：だめだよ。こっち見ちゃ。

キキ：私、前は何も考えなくても飛べたの。今はどうやって飛べたのか、
分からなくなっちゃった。

絵かき：そういうときはジタバタするしかないよ。描いて描いて描きまくる。

キキ：でもやっぱり飛べなかったら。

絵かき：描くのをやめる。散歩したり、景色を見たり、昼寝したり、何もしない。

そのうちに急に描きたくなるんだよ。

キキ：なるかしら。

絵かき：なるさ。さっ、ほら、横向いて。私さ、キキくらいの時に絵描きになろうって

決めたの。絵描くのが楽しくてさ。寝るのが惜しいくらいだったんだよ。

それがね、ある日全然描けなくなっちゃった。描いても、描いても気に

入らないの。それまでの絵が誰かの真似だって分かったんだよ。どこかで

見たことがあるってね。自分の絵を描かなきゃって。

キキ : 苦しかった。

絵描き : それは今も同じ。でもね、その後、少し前より絵を描くってこと分かったみたい。
魔法ってさ、呪文を唱えるんじゃないんだね。

キキ : うん、血で飛ぶんだって。

絵描き : 魔女の血か。いいね。私そういうの好きよ。魔女の血、絵描きの血、
パン職人の血。神様が誰かがくれた力なんだよね。お陰で苦勞もするけどさ。

キキ : 私、魔法って何か、考えたこともなかった。修行なんて古くさいしきたりだって
思ってた。今日あなたが来てくれて、とてもうれしかったの。
私一人じゃ、ただジタバタしてただけだわ。

絵描き : あのね、この絵、ほんとは消しちゃおうかって何度も思ったんだよ。

キキ : こんな素敵なのに。

絵描き : 今日キキに会ってさ。悩んでるキキの顔見たらさ、これだって描けそうな
気がしてきたの。

キキ : 意地悪。

絵描き : はっはっはっ、だから、あいこ。

キキ : うふふ。

絵描き : さっ、消すよ。

キキ : うん、ベット取っちゃって悪いね。

絵描き : いいよ。

キキ : 時々、ここに来ていい。

絵描き : うん、夏中はいる気だから。私も時々会いに行くよ。

キキ : うん。

テレビ : 豪雨のため当市に不時着した飛行船「自由の冒険号」は、
このほど修理をすませ、本日南極探検への旅を再開することになりました。
おその : はーい、グーチョキパン店です。あっキキ。うん、もっとゆっくりしていても
いいのに。あっ、それからね。この前のおばあちゃんが、また来てくれって。
どうする。断ろうか。
当分お休みって言ったんだけど、どうしてもって言うのよ。
そう、じゃ帰りに寄ってね。はい。

(おばあさんの家)

キキ : こんにちは。

おばあさん : まあまあ、お待ちかねですよ。

キキ : 参りました。奥様。

奥様 : いらっしゃい。今日はこのままで勘弁してね。お天気がいいのに足が痛むの。
ばあさん、あれを。

おばあさん : はいはい、奥様。飛びましたか。

奥様 : まだよ。おかしいのよ。この人、飛行船に夢中なの。

おばあさん : 冒険が好きなんです。

奥様 : ちょっと音小さくしてね。キキ、この箱ちょっと明けて。

キキ : はい。奥様、これ。

奥様 : それをキキという人に届けてほしいの。この前とってお世話になったから、
そのお礼なのよ。ついでにその子のお誕生日を聞いて来てくれると、
うれしいんだけど。またケーキを焼けるでしょ・・・キキ。

キキ : きっと、きっと、その子もおば様のお誕生日を知りたがるわ。プレゼントを

考える楽しみができるから。

奥様 : ほんとね。

キキ : うふふ。

奥様 : どうしたの。

おばあさん : 何か事件が起きたようですよ。

テレビ : 大変です。ロープが切れました。飛行船が流されています。

あっ、飛行船が 我々に向かって、、、、。

おばあさん : 肝心の時に何を映してんだらうね。

奥様 : 夏に時たまこういう風が吹くの。じきにここへも来るわ。

大丈夫、通り過ぎるだけよ。

おばあさん : 奥様、映りましたよ。逆さまになってる。こうなるとただの風船ね。

テレビ : 逆立ち状態になりました。現在残された最後のロープを固定する作業が、

必死に続いています。果たして飛び立とうとする飛行船を、つなぎ止めることが

できるでしょうか。あっ、だめです。すさまじいヘリウムガスの力で、

ドンドン上空へのぼって行きます。

キキ : トンボ。あの子私の友達なの。

おばあさん : は一。

テレビ : 次々と払い落として上昇して行きます。あー、パトカーまで、まるでおもちゃのように軽々と、
は一、何ということでしょう。

少年が一人、パトカーと一緒にさらわれました。

キキ : あっ。

奥様 : あなたのお友達ですって。

キキ : 私、行きます。

奥様 : 気をつけてね。

おばあさん : 大変。

市民 : ガンバレー。手を放すな。しっぽのヘリウムを抜け。急げ。

放送 : 市民は落ち着いて行動してください。飛行船のヘリウムガスは爆発しません。

市民は落ち着いて行動してください。

キキ : トンボは、男の子は無事ですか。

市民 : さあ、パトカーは落ちたって言ってたけど。

老人 : 大丈夫かね。

キキ : おじいさん、そのブラシを貸してください。

老人 : うむ。

キキ : お願い。必ずお返しします。

老人 : うむ。そりゃまあ。

キキ : すみません。

老人 : あーっ。

キキ : 飛べ。

老人 : 飛んだ。

キキ : 真っすぐ飛びなさい。燃やしちゃうわよ。

テレビ : 少年はまだ無事ですが、飛行船「自由の冒険号」は風に流されて、

シティータワーに近づいて行きます。このままではシティータワーとの衝突は

避けられません。

トンボ : ぶつかるぞー。高度をあげろ。

乗員 : ガスが足りない。ぶつかる寸前に塔に飛び移れ。

トンボ : やってみます。

老人 : おーい。ここへ来いよー。

トンボ : おじいさん、逃げて。

老人 : つかまれ。

キキ : もっと早く、こらー。

テレビ : お聞きください。すごいガス漏れの音です。小年がどうなったか、

この角度からは見えません。アー。倒れます。ガスが抜けて飛行船が倒れます。

引っ掛かった、止まった、止まりました。

男の人 : あそこを見ろ。

テレビ : いた、少年がいました。奇跡です。少年はまだぶら下がっています。

だがいったいどうやって助ければよいのでしょうか。このままあの勇敢な少年を

見捨て・・・なっなんだあれば。鳥、違います。少女だ、少女が空を

飛んでいます。魔女です。ハウキ、じゃない、デッキブラシに乗った魔女です。

奥様 : あっキキよ。

おばあさん : それー。

おその : あの子飛んだわ。

男の子 : 頑張れ。

キキ : トンボー。

トンボ : キキ。

キキ : こら、いい子だから言うこと聞いて。

乗員 : オーイ。頑張れ。もうちょっとだ。頑張れよ。おーい。

キキ : トンボ。

トンボ : キキ。

テレビ : ガンバレ。もうちょっとだ。

観衆 : 頑張れ。頑張れ。

トンボ : うわーっ。

テレビ : 受け止めた。空中で受け止めました。今、地上に降り立ちました。

感動的な光景です。飛行船の乗員も無事のように。



老人 : あのデッキブラシはわしが貸したんじゃぞ。

奥様 : やめてよ。ばあさん。

おその : 偉いよ。キキ。よくやったね。あ、あんた。先生を呼んで、生まれそうよ。

主人 : おっ。

キキ : ジジ。

ジジ : ニャーオ。

父 : かあさん、キキからの手紙だよ。

母 : えっあっ。

父 : お父さん、お母さん、お元気ですか。私もジジもとても元気です。

キキ : 仕事の方も何とか軌道に乗って、少し自信がついたみたい。落ち込むこともあるけれど、私この町が好きです。

